CHIBA COC+

成果報告書

2015-2019



CHIBA CCC+

2015-2019

わたしたちは、千葉県の若者が流出超過する地域を "千葉地方圏"として、5年間にわたり千葉地方圏を 元気にする取り組みを進めてきた。

5年が経過し、残念ながら東京一極集中には歯止めが掛かっていないが、千葉の地方部にフォーカスすれば、学生の若い力が参入し、地域を元気にするさまざまな活動が生まれてきている。それがなによりのCHIBA COC+の大きな成果である。

わたしたちは、ここで歩みを止めることなく、千葉を さらに一体化して、千葉を元気にする活動を進めて いこう。

CONTENTS

1.	プロジェクト	P06
	千葉県COC+ Project Map	P07
	千葉大学	P09
	木更津工業高等専門学校	P21
	千葉工業大学	P25
	千葉科学大学	P29
	聖徳大学短期大学部	P33
2.	教育	P38
	千葉大学	P39
	敬愛大学	P40
3.	シンポジウム	P44

平成27年度文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+) | 採択事業

都市と世界をつなぐ千葉地方圏の"しごと"づくり人材育成事業について

事業コンセプト

地域産業イノベーション人材の育成

首都圏に近く、成田空港を有する立地を活かし、都市の研究シーズを千葉 に集約させ、地方に還流し、地域産業にローカル・イノベーションを興す 「地域産業イノベーション人材」を育成する。

地方創生先進モデルの提案

海と山に囲まれ、都市と農村が共存する千葉県は「日本の縮図」とも言え、 本事業が人口減少課題に直面する日本の地域創生先進モデルとなること を目指す。

事業目標

若者の就職率の向上

事業協働地域における就職率を3% (平成26年度)から13% (平成31年 度目標)に向上させる。そのうち1割を雇用創出等によるものとする。

事業協働地域



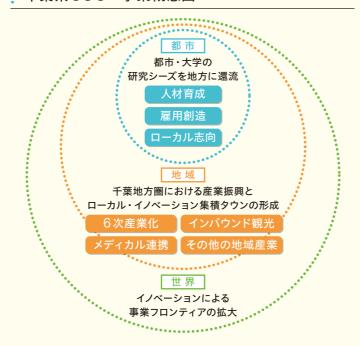
千葉県における人口動態の特徴と課題

千葉県は、東京に近接し若者人口が流入超過する「都市圏」と、若者人口が 流出する「地方圏」に二分されている。千葉地方圏では、若年層の人口減少、 地域産業の後継者不足、地域経済の縮小と衰退、少子高齢化といった課題 がある。

事業協働地域

千葉県COC+では、千葉地方圏を事業協働地域としている。地域や産業ご とにコンソーシアムを設置し、課題解決に取り組んでいる。

· 千葉県COC+ 事業概念図



千葉地方圏の協働体制図













































₩(知)の拠点







千葉県 COC+ Project

9 山武市

・成田空港経済圏・オリパラ事業を活用した

- グローバル人材育成 城西国際大学 ●地域医療を支える人材育成と就業支援 城西国際大学
- ●サンブスギを活用した地産地消住宅 **千葉大学**

10 いすみ市

- ●オリンピック開催に向けた異文化交流 **千葉大学**
- ●第1次産業を活かしたツーリズム研究 「葉大学
- ●いすみがくプロジェクト T葉大学

- ●新規創業素材(海藻)調査 **千葉大学**

11 芝山町 🖟 🕢





- ●NARITAプログラムの推進 敬愛大学
- ●空港南側圏のソーシャルビジネスの育成 **敬愛大学**
- ●観光DMOと連携した地域の魅力強化 T葉大学

12 横芝光町 📗



- ■ニューツーリズムによる観光まちづくり 千葉大学
- ●モツのブランド化 **千葉大学**
- 横芝光町の情報化・製品化 f葉大学
- ●地元高校での地元愛醸成ワークショップ 千葉大学

13 長柄町

- ●リソル生命の森CCRCグランドデザイン 「葉大学
- ●長柄町版大学連携型生涯活躍のまち 千葉大学
- ●健康寿命延伸プログラムの実践 **千葉大学**
- ●カレッジタウン生涯学習プログラム **千葉大学**
- ●地産地消エネルギーの活用検討 **千葉大学**
- ●長柄町特産飲料開発 千葉大学

御宿町

- ●生涯活躍のまちおんじゅく支援プログラム の開発「千葉工業大学
- ●御宿こども工務店 千葉工業大学
- ●ON19サミット 千葉工業大学
- ●星空教室 千葉工業大学

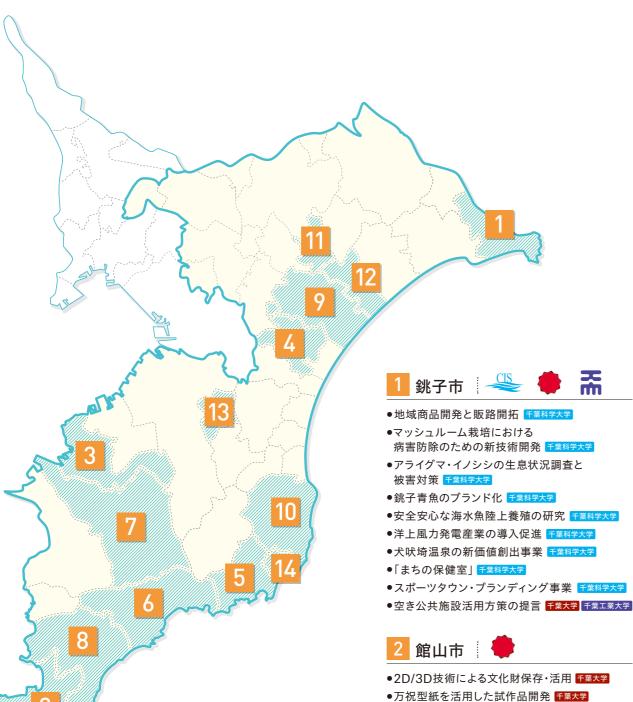
※このプロジェクトマップの各プロジェクト名称は総称あるいは略称であり、次ページ以降の プロジェクト紹介の名称とは一致しない場合があります。

千葉県COC+ Project Map

自治体、企業、大学、学生が一丸となって 千葉地方圏の課題解決に取り組んだ。

千葉県内の大学が連携し、千葉地方圏の課題解決に挑戦した。

各大学の強みを活かしながら、千葉地方圏を元気にするための様々な取り組みが進行した。



●JIU地域創発セミナー 館山信用金庫・南房総観光連盟との 包括的地域連携協定に基づく地域活性化 城西国際大学

●移住・定住に向けた四方木地区活性化プロジェクト 城西国際大学

- ●ユニバーサルフォーラム ユニバーサルなまちづくり活動 城西国際大学
- ●駅からハイキング JR東日本×城西国際大学観光学部の 無料旅行企画 城西国際大学
- ●安房の地域文化に関する調査研究 千葉大学
- ●大山小学校跡地活用 千葉大学

鴨川市

●道の駅プロジェクト 城西国際大学

3 木更津市 🖟 🦓

●デザインサーベイ 千葉大学

5 勝浦市

●オーガニックツーリズム開発 千葉大学

●オープンデータ活用によるICT戦略の促進 ★更津工業高等専門学校

問題解決技法による企業等の問題解決 ★更津工業高等専門学校

●オーガニックシティプロジェクト **木更津工業高等専門学校**

●市民体験プログラム 木更津駅前ブック・カフェの展開 木更津工業高等専門学校

●植物工場の高度化と6次産業に関する研究実証 *★更津工業高等専門学校

●道の駅「みのりの郷東金」活用6次産業化プロジェクト 城西国際大学

●インバウンド誘致のためのNPO法人設立支援 T葉大学

地域資源を活用した魅力発見の検討 f葉大学

●空き公共施設活用方策の提言 **千葉大学 千葉工業大学**

ヘルスケアや地域環境保全活動によるまちづくりの推進 城西国際大学

スポーツによる地域振興支援 千葉大学

7 君津市

●里山振興プロジェクト **千葉大学**

8 南房総市 5







- ●南房総市の食材を使った新たな名品づくり型徳大学短期大学部
- ●子育てサポーター育成プロジェクト **聖徳大学短期大学部**
- ●南房総市の昔話絵本制作プロジェクト **聖徳大学短期大学部**
- ●房総うちわ魅力再発見プロジェクト 型徳大学短期大学部
- ●新たな門出応援プロジェクト **聖徳大学短期大学部**
- ●南房総市ファッションショー開催プロジェクト型徳大学短期大学部
- ●道の駅改修マスタープラン作成支援プロジェクト ^{聖徳大学短期大学部}
- ●空き家公共施設活用プロジェクト **千葉工業大学**
- 水耕栽培による農地利活用プロジェクト f葉工業大学
- ●地域資源「キンセンカ」を活用した地域おこし 千葉工業大学
- ●地域課題解決アプリ・システム開発プロジェクト 千葉工業大学
- 持続可能な集落創造プロジェクト f葉工業大学
- ●海洋資源利活用プロジェクト f葉工業大学
- 地域創生活動の連携促進プロジェクト 千葉工業大学
- ●若者と市民との交流創出プロジェクト 千葉工業大学
- ●地域資源「神社仏閣、万祝」を活用したインバウンド観光 千葉大学
- ●サイクルツーリズム開発 **千葉大学**
- ●空き公共施設活用方策の提言 **千葉大学** 千葉工業大学

地域資源を活用したニューツリズムの検討

担当教員 国際教養学部 鈴木雅之准教授、コミュニティ・イノベーションオフィス 大蔵純也特任助教、大学院工学研究院 田島翔太特任助教

担当学生 事業協働機関 横芝光町

平成28年度~平成30年度

事業概要

全国的に人口減少・少子高齢化が深刻化するなか、横芝光町では、町民と 協働し地域資源の掘り起こしと最大限の活用により、横芝光町および周辺 地域の地方創生を目指し、平成28年度より千葉大学とのCOC+事業の 一環として共同研究による多様な取り組みを行ってきた。具体的には、栗 山川や里山、九十九里浜、また四季折々の田園風景、多彩な自然と、首都 圏の食料基地として新鮮で良質な農水産物や畜産物、加工品等の地域資 源を活用して、より多くの人々に横芝光町の魅力を周知し、「訪れたい」と 思わせる、魅力あるまちとするため、観光資源の掘り起こしと観光商品化、 観光人材の育成、観光受け入れ態勢の構築、情報発信等により、新たな観 光地の形成 (ニューツーリズムの開発) に取り組んだものである。平成29 年5月に一般社団法人横芝光町観光まちづくり協会が発足、平成30年4 月にはJR横芝駅前に新たな町の窓口となる情報交流施設「ヨリドコロ」 が開設したことを踏まえ、今後のさらなる来訪者・関係人口の獲得に向け てニューツーリズム事業の展開を検討した。

平成28年度

ニューツーリズム 検討地域資源の掘 り起こし事例分析

平成29年度

観光ツアーの試行 ガイドの育成販路 開拓

平成30年度

カヤックツアー開発 ガイドの育成・強化 受け入れ体制の整備

横芝光町

千葉大学

設置・運営

横芝光町 タウンマネジメント講座会議

試行

よこぴか倶楽部









千葉大学と町民が共同して取り組んできた地域資源を活用した ニューツーリズム関連調査では、地域資源の掘り起こしから、ツ アーの組み立てやモニターツアーの販売までを行ってきた。そして 検討を共に進めるための町民メンバーを集め、タウンマネジメント

人材育成事業と連携してガイドの育成を進めた結果、様々な産業 に関わる人材が「よこぴか倶楽部」を結成し、(株)モンベルから のアドバイスを活かしながら自らツアーを開催するまでに成長す ることができた。

楽しく学べる地方創生ボードゲームをつくる

担当教員 国際教養学部 鈴木雅之准教授

担当学生 カレッジリンク@横芝光町 受講者(千葉大学、横芝光町民)

事業協働機関 横芝光町 事業期間 平成30年度

事業概要

横芝光町を舞台にして、人口減少時代の町の地方創生(移住 者の獲得、まちづくり)を、さまざまなまちの資源や課題を取 り入れながら、楽しく学べるボードゲームを制作した。制作に あたっては、千葉大学のカレッジリンクという授業を平成30 年10月に横芝光町のローカルハブで開講し、学生15人、町民 5名がワークショップを実施した。学生は町民からリアルな情 報を得ることができ、町民は学生目線の情報、アイディアから 学び合うことができた。ボードゲームの舞台は、横芝駅前、屋 形海岸周辺、坂田池周辺の3か所で、それぞれ受講者が現地 まち歩きを行い、ポテンシャルや課題を見つけ出し、ボード ゲームに落とし込んでいった。ボードゲームの内容は、それぞ れのエリアのテーマを決め、町民や来街者等の役割に扮した プレーヤーがそれぞれのテーマを実現するためにふさわしい ツールカードを提案し、その貢献度を競い合うものである。 ゲームによって、地方創生の難しさ、アイディアによってはこれ まで考えられてこなかった可能性に気付くようなストーリーが 内蔵されている。









ボードゲームの検討

制作したボードゲームのプレイ

修了証書授与式

制作されたボードゲームは、多くの町民が集まる駅前情報交流拠 点に置かれたり、町役場の職員研修や、横芝光町にある横芝敬愛 高校の生徒の授業等においてプレイされたりし、楽しみながら、 町の地方創生への理解と関わりが深まるようになっている。また、

このボードゲームづくりの手法は、千葉大学の他の授業にも取り 入れられ、学生はボードゲームをつくるというPBLと、地方創生へ の理解という両方の学びを得ている。

横芝光町の情報化・製品化 チバテレコラボ

担当教員 コミュニティ・イノベーションオフィス 阿部厚司特任講師

平成28年度:柴田一樹、渡辺裕之、渡口ひかり、山本恭輔、藤本夏海 平成29年度:櫻庭唱子、郡司日奈乃、山野詩織

事業協働機関 千葉テレビ放送株式会社 平成28年度~平成29年度

事業概要

事業協働機関である千葉テレビとの協働により、横芝光町の良いと ころ、地域資源を学生が見つけ出し、それらを情報化、製品化する取 り組みを行った。一連の活動は、ドキュメンタリー番組として取材が続 けられ、それらの成果を千葉テレビの情報番組として紹介するという メディアミックスも特徴である。1年目(平成28年度)の取り組みは、5 人の千葉大生が見つけた横芝光町のおすすめを紹介する「ここきて! よこぴか」プロジェクトである。2ケ月間、企画から現地ロケ・アイテム 作成などほぼ全てを学生が考え、実施した。ご当地マップ、おすすめプ レートが制作され、おすすめプレートは、それらの店舗等に飾られた。 2年目(平成29年度)は、横芝光町内にあるアイスメーカー「ナミキア イス | の協力を得て、3人の千葉大生によるアイスの新メニュー開発・ 販売先の開拓・販促グッズによる広報展開・実際の販売など製品開発 を行った。新メニュー(味)については、県内の特産品を試食するなど し、横芝光町と県内の特産品との連携が行われることが特徴となった。



「熱血BO-SO TV | 出演



おすすめ店「よこぴか」プレート



アイス開発のための打ち合わせ



道の駅でのアイスの販売



完成した5種類の千葉大アイス

これらの成果と活動の様子を収録した映像は、千葉テレビの情報 番組「シャキット!」(1年目)「熱血BO-SO TV」(1、2年目) の生 放送で学生自ら出演し紹介された。また、2年目で、完成した5つ のアイスは、「千葉大アイス」と名付け、千葉大学生協ほか、道の駅

や都内のイベント等において限定3000個を販売開始した。1年 目の活動で生まれた「よこぴか」は、その後の横芝光町内の取り 組みのキーとなるキャッチコピーとなっている。

空港南側圏のサイクルツーリズムによる地域創生

担当教員 コミュニティ・イノベーションオフィス 阿部厚司特任講師、大蔵純也特任助教

担当学生 サイクリング部

事業協働機関 芝山町、一般社団法人みどりと空のプロジェクト

事業期間 平成30年度~令和元年度

事業概要

芝山町は成田空港南側圏に位置し、人口減少・少子高齢化のほか、成田空 港の機能拡張など、空港南側圏を取り巻く環境が大きな転換期を迎えて いる。そこで、千葉大学は、芝山町の受託を受け、町内観光DMO「一般社 団法人みどりと空のプロジェクト」および地域事業者等と連携し、芝山町 の地域資源の掘り起こし、および空港南側圏のサイクルツーリズムの開発 を検討した。検討にあたっては、まず、地域の方および千葉大学学生有志 でまち歩きを実施し、空港南側圏におけるサイクルコースのモデルコースを 作成した。そのサイクルコースを前提として、NAAおよび関係企業、芝山町 との連携により、サイクルツアーを試行し、約30名の参加者を得て、参加 者アンケートにより今後のサイクルツーリズムの展開に関する検証・課題 の抽出を行った。参加者のしばやまサイクリングへの感想は、「すごく楽し かった」が56.8%、「楽しかった」27.0%と参加者の8割以上から好評を 得た。サイクリングコースに対する感想は、「満足」が51.4%「どちらかとい うと満足」が27.0%であった。



地域住民へのヒアリング



地域の関係者とのミーティング

16.2% 56.8% 27.0% すごく 楽しかった 楽しかった その他 21.6% 51.4% 27.0% どちらかと 満足 満足



GSP(グローバル・スタディ・プログラム)でドイツの学生と

芝山町は、芝山千代田駅を基点としたサイクルツーリズムの振興 を決定し、令和元年12月、民間企業によってオープンする駅前温 浴施設には、サイクルポートが設置される。また、今回は芝山町で のサイクルコースであったが、令和元年度は、隣接市町である横芝

光町、山武市と連携し、広域なサイクルコースを作成している。そ のため、千葉大学はデモ・サイクルツアーを数回開催しながら、検 討を進めている。

11

南房総市における産学協働地域活力創造事業

担当教員 大学院工学研究院 植田憲教授、コミュニティ・イノベーションオフィス 阿部厚司特任講師

担当学生 デザイン文化計画研究室 学生・留学生

事業協働機関 南房総市

事業期間 平成29年度~令和元年度

事業概要

南房総市の地域資源の再発見・再認識による観光創生方策提言を行うため、学生・留学生が市内関係者の協力も得ながら、調査研究や、廃校活用事例であるシラハマ校舎内のサテライトオフィスを活用して合宿の実施・事業提案・商品開発等を行い、地方創生事業報告会にて報告を行った。またこれらの研究活動の結果を踏まえた商品開発にも着手し商品化を実現、東京駅並びに成田空港内のアンテナショップ・安房地域内の道の駅・博物館などでも販売。

主な活動内容

- **彫刻3Dデータ活用** = 歴史的造形物×3Dテクノロジー
- 「万祝」図柄デジタルデータ活用=「万祝」の図柄を生かした提案
- 地域の魅力を伝えるメディア制作 = 和田浦の地域資源のデザイン提案
- サイクルツーリズム=三芳地区の地域資源を「サイクルガイドマップ」「カルタ」
- ガストロノミーツーリズム=食文化の再発見・再認識のための保存と発信



地域事業者へのヒアリング



十二神将極彩色再現の展示



東京丸の内「KITTF I での販売



万祝図柄を活用した万祝グッズ



出てきた様々なアイデアを皆で議論

成 果

地域活動による研究成果をただ記録として残すだけでなく、報告 会などで頂いた様々な意見を取り入れ、さらには各地でのテスト マーケティングを重ねながらブラッシュアップを図り、それらを実 際に「商品化」して「販売実績」を挙げることができた。その結果、

南房総市を含む安房地域の認知度アップや経済活動にも貢献できるなど地域と大学にとってWinWinな成果を挙げることができた。

いすみ市における域学連携事業による学生の地域活動

担当教員 コミュニティ・イノベーションオフィス 阿部厚司特任講師、加藤美栄特任助教

担当学生 いすみがく、ローカル・プロジェクト演習 参加学生他

事業協働機関 いすみ市

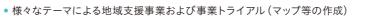
事業期間 平成28年度~平成30年度

事業概要

千葉大学のローカルハブを設置しているいすみ市においては学生が地域住民や自治体・民間企業と連携して地域の課題を理解し、自身のスキルを活かした活動ができるような各種プログラムを実施した。また学生が自ら地域で課題を見つけ、その解決に向けた活動を行う「いすみがく」プロジェクトなども継続的に実施するとともに、その活動拠点として市内商店街にある旧商家の倉庫を学生も共同で改修・整備し、リノベーションの実態を学ぶなど幅広い活動を行った。

活動内容

- 若手農家、市役所へのインターンシップによる地域での仕事の体験
- 地域企業とのコラボによる地域資源を使った新商品開発やそのロゴマークの提案等
- いすみ市内での写真撮影・鑑賞を通じて「写真による」 いすみのプロモーション活動
- いすみのチーズ工房をめぐるサイクルツアー企画とサイクルマップ作り





千葉大学いすみ市拠点



千葉大「地域イベント」で出席



方内のイベントにも出店



生による製作風景



拠点でのミーティン



地元事業者へのヒアリング

成

移住者も多く小商いが活発ないすみ市において、様々な活動を通して事業者や自治体関係者など地元住民と学生の協働を通じて、ローカルエリアで働くことの意味や楽しさを学ぶとともに、遊休施設のリノベーションによる活動拠点の整備、商品ロゴマークの

作成や新商品開発、各種観光関連マップの作成など、学生が主体 的に関わったうえで持続的に地域貢献ができ、その結果として形 として残る実績を挙げることができた。

木更津市における観光創造「デザインサーベイin木更津」

担当教員 大学院工学研究院 植田憲教授、コミュニティ・イノベーションオフィス 阿部厚司特任講師

担当学生デザイン文化計画研究室学生、工学部デザイン学科学生

事業協働機関 木更津市

事業期間 平成28年度~令和元年度

事業概要

デザイン専攻の学部生・大学院生・留学生などが「木更津市における観光創造」を テーマに地域の調査に入り、地域資源を再発見・再認識して観光創造に向けたデ ザイン提案へとつなげるプロセスを学ぶ演習授業「デザインサーベイ」を実施。こ れは「野に出て生活を学ぶ」ことで大学という「閉鎖環境」から現場である「地域 社会」に身を置き、豊かな生活文化を直接的・体感的に学ぶ貴重な機会。

活動内容

例年夏休み期間中に合宿を行い、卒業などにより学生が入れ替わりながらも「サイクリングマップ製作」「古民家・空き家の活用提案」「自然素材を活用したモノづくり提案」「海辺の資源の活用事例の調査と提案」「食文化と農の魅力・アグリツーリズムの提案」「海辺の暮らし散策マップ製作」などのテーマを引き継ぎながら年々内容を充実させてきた。毎年、合宿の最終日には市民向けの活動報告会を実施、その他にも市内で行われるイベントなどでも成果発表を行い、関心を持ってくれた市民とともに協働するなど同市が目指す、オーガニックシティの実現に向けてサスティナブルな活動を続けている。



地域のサイクル関係者へのヒアリング



木更津市長への説明



市民向け報告会



市内の調査風景



学生によるモニターツアー風景

成果

活動の中で蓄積したデータなどを基にまち歩きマップやサイクルマップなどが毎年バージョンアップされ、また発見した地域資源を活用して学生自らがガイドツアーを企画・商品化したりとキャンパスでは学べない実践の場での成果があげられた。またデザインサーベイ活動を通して木更津を気に入り、卒論テーマを木更津の

まちづくりとした学生が卒業後に木更津市に移住&市の観光協会に就職し、自身の提案を実際にツアー商品として具体化、さらには後輩たちの活動へのフォローを続けながら地域の課題解決と自身の成長を実現できた。

地域を活性化するための空き公共施設活用方策提案

担当教員 国際教養学部 鈴木雅之准教授、大学院工学研究院 松浦健治郎准教授

コミュニティ・イノベーションオフィス 阿部厚司特任講師

世 担当学生 工学部学生、松浦ゼミ学生 事業協働機関 銚子市、勝浦市、南房総市

事業期間 平成29年度

事業概要

「空き公共施設活用による企業誘致」を積極的に推進している千葉県の方策に基づいて銚子市、勝浦市、南房総市にある廃校などの「空き公共施設」の活用について、地域経済を活性化するにはどのような方法が望ましいかを学生の視点から調査・研究を実施。それぞれ模型製作も含めて効果的な活用方策を取りまとめ、市長をはじめ自治体関係者や市内事業者等に提言するプロジェクトを、株式会社ちばぎん総合研究所からの委託で千葉大学・千葉工業大学・千葉商科大学のチームにより実施した。

主な活動内容

千葉大学からは計18名の学生が参加し、それぞれ以下の通り最終提案を行った。

① 銚子市 (対象: 旧猿田小学校) → 「猿田×WEDDING 訪れて幸せになれるまち」

② 勝浦市 (対象:旧清海小学校) ⇒「かつうら うみのがっこう

~安心・安全な海作りプロジェクト」

③ 南房総市 (対象:南小学校・幼稚園) ➡ 「くだものの学舎 ~南小学校の再生~」



勝浦での報告会



サルニトスイメージ図①



学生によるイメージ図②



服告会にて模型を使ってプレゼン



銚子での報告会



ペスターと模型による展示



報告会の様子

成

学生自らが廃校を抱える各地域でのヒアリングにより住民感情を 理解し、また各地の地域資源の発掘などの現地調査を重ね、それ らを基にそれぞれの地域の特性も考慮しながら若者視点による新 たな提案を行えた。またこれらの活動を通じて、新たなビジネス

展開や雇用の創出など今後のローカルエリアでの可能性について 考察・提案でき、何より若者が地域を訪れることで地域住民が元 気になれたのも成果の一つと思慮される。

15

長柄町版大学連携型生涯活躍のまち・リソル生命の森 CCRC

研究統括 大学院工学研究院 田島翔太特任助教

研究推進 予防医学センター 近藤克則研究室、花里真道研究室、工学研究院 上野武研究室、松浦健治郎研究室、

園芸学研究科 三谷徹研究室、岩崎寛研究室、国際教養学部 鈴木雅之准教授

事業協働機関 リソル生命の森株式会社 事業期間 平成27年度~現在

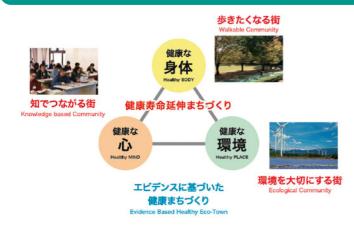
事業概要

長柄町版大学連携型生涯活躍のまち (日本版 CCRC) は、町内の健康複合リゾートであるリソル生命の森を核として、エビデンスに基づいた健康まちづくりを産官学共同で推進する事業である。平成27年度から構想に着手し、研究推進チームで策定したコンセプトのもと、ハードの整備とソフトの充実の両面から健康まちづくりにアプローチしている。

主な活動内容

- 健康寿命の延伸: 予防医学センター近藤教授監修の「ウェルネスエイジクラブ」
- 生涯学習プログラム: 学生と住民がともに学ぶカレッジリンクや、お茶の間ゼミの開催
- 歩きたくなるまち:自然の中で、高低差を利用し、歩いて健康になるアクティブ・トラックの整備
- 宿泊事業の高付加価値化:もみじの里エリアのリノベーション (グランピングエリアの設計)
- 園芸プログラム: 自然環境を生かしたセラピープログラムの開発
- ユニバーサルデザイン:CCRC向けのホテルリノベーションの提案等

リソル生命の森大学連携型CCARC構想のコンセプト



リソル版 CCRC の基本コンセプト



予防医学に基づく健康寿命延伸プログラム



カレッジリンクプログラム



CCRC の中核となるリソル生命の森 (千葉県長柄町)

成果

千葉大学の様々な分野の研究室が連携し、「健康まちづくり」のためのシーズを投入して、日本でも有数の本格的な大学連携型 CCRCの実現に向けて取り組んでいる。リソル生命の森を研究の社会実装の一つの舞台として活用することで、研究や学習の実践

的な場となっている。カレッジリンクでは学部学科を超えた学生 たちが毎年長柄町を訪れ、CCRCを軸とした町のブランディング のテーマに取り組んでいる。

WACo一予防医学に基づく健康で活動的なコミュニティの創出

担当教員 大学院工学研究院 田島翔太特任助教 他

事業協働機関 株式会社竹中工務店、積水ハウス株式会社、株式会社富士通ゼネラル、リソル生命の森株式会社、

イオン株式会社、日本電気株式会社、船橋市、松戸市、長柄町、柏市、墨田区等

事業期間 平成30年度~6年間

事業概要

千葉大学COC+の研究活動のアウトリーチの一つとして、「予防医学に基づく、健康で活動的なコミュニティの創出」をテーマとした産官学連携事業を行っている。これは、産学共創プラットフォーム共同研究推進プログラム(OPERA)と呼ばれるJSTの補助事業で、オープンイノベーションによる産学連携研究に対して同額の研究補助金を付けるもの。リソル生命の森CCRCの実現が研究課題の一つと位置付けられており、長柄町での健康まちづくりの社会実装を目的として、各企業と連携しながら、最終的に健康まちづくり分野におけるベンチャー企業の設立まで目指している。

主な活動内容

- コンソーシアムによる健康まちづくりに関するオープンイノベーションの共有
- 3つの研究テーマ: (1) エビデンスベースドな空間デザイン・設計手法
 - (2) 地域・空間連動型ウェルネスプログラム
 - (3) 地球環境・デザイン評価シミュレータ





3 健康 CCRC の実現 RE OL リンル生物の語

自然を活かした健康プログラムの開発 大学連携型CCRC リソル生命の高大学連携型CCRC (Continuing Care Retirement Community)事業を選じて、地域の豊かな自然環境と呼応する機関コミュニティづくりをかざします。健康プログラムを開発し、そのプログラム と呼応した空間づくいを含さないます。









イノベーションジャパンへの出展

成具

イノベーションジャパン2019大学見本市に出展し、多くの企業様から事業への参画提案を頂戴している。今後、参画企業を増やし、

オープンイノベーションによる健康まちづくりを推進する。令和2年度から本格実施フェーズに入る。

17

ながらとガラナ いろはにほへと 長柄町特産飲料開発

担当教員 大学院工学研究院 田島翔太特任助教

塩谷桃加、大石真帆、藤澤ちひろ、加治屋里奈、伊藤絵実里、赤澤奈津美、石原滉士 担当学生

事業協働機関 長柄町、ジャパンフーズ株式会社、株式会社ナリヅカコーポレーション、リソル生命の森株式会社、

株式会社ミライノラボ、株式会社自由区域

令和元年度 事業期間

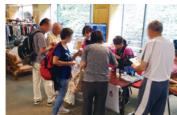
事業概要

長柄町は大学連携型生涯活躍のまち(日本版 CCRC)を推進し、これまで千葉大 学とともに生涯活躍のまち地域再生計画の策定、移住定住推進施策の策定、学 生による移住定住ガイドブックの作成等を行ってきた。4年目となる令和元年度 においては、町のことをより多くの人に知ってもらえる特産品開発を町内の企業と ともに企画することとした。その第1弾として、町内の飲料水製造メーカーである ジャパンフーズ様を中心に飲料水の企画開発に着手。学生メンバーの発案によ り、長柄町の「ながら」と、昨今エナジー飲料に採用されている「ガラナ」を掛け 合わせた「ながらとガラナ いろはにほへと」を開発。今年度中に製造ラインに 乗せて完成する予定である。

主な活動内容

- 地域資源の洗い出し
- 町内企業とのコラボレーション (産官学連携)
- 学生による商品企画・開発
- 学生によるネーミング開発、パッケージデザイン
- プロモーション戦略の立案







スポーツをした後に飲みたくなるすっきりした飲料水をコンセプトに、リソル生命の森にて運動後のアクティブ・ 完成した「ながらとガラナ いろはにほへと」 シニアに対する試飲会を実施した。





学生による検討の様子



長柄町の名称を用いて全く新しい発想で飲料水を開発し、その過 程を通して町の地域資源の洗い出しや、役場とのディスカッショ ンを行った。このような実践的な開発は町にとっても学生にとって も初めてのことであり、様々な課題はあったものの、期限内に味、

ネーミング、パッケージデザイン、プロモーション戦略等を行うこ とができた。今後、6万本を製造し、町の特産品としての配布や返 礼品としての活用などを検討している。

愉くらしの家一サンブスギを活用した地産地消住宅

担当教員 大学院工学研究院 田島翔太特任助教

担当学生 菊地むつみ、呉ショウイ、飯塚大智、小澤彩花、園芸学部 岩崎寛研究室

事業協働機関 山武市、株式会社大功 他

平成29年度~ 事業期間

事業概要

本事業は、サンブスギを活用した地産地消の住宅を産学連携で 開発し、地域産材の価値を広く社会に伝えることを目的とする。 千葉県内にはサンブスギと呼ばれる地域産材がある。しかし、 国内の森林資源活用の衰退、高齢化による担い手不足に加え、 溝腐病の蔓延により建築材としての需要が低下し、森林の荒廃 へと繋がっている。そこで、松戸市にある材木店が中心となり、 宮大工、建築家とともに、サンブスギを活用した地産地消住宅 「愉くらしの家」を商品化した。地産地消材の活用は森林資源の 保全だけでなく、地域内における経済・社会の循環により地域 産業の振興や雇用創出、地域コミュニティの維持といった持続 可能な地域づくりに貢献することができると考える。

主な活動内容

- サンブスギの特徴と課題の整理(フェーズ1)
- 木材の住まいへの効果の把握とモデル住宅の木質化の検討(フェーズ2)
- コンセプトとブランディングの立案 (フェーズ3): 学生によるロゴの開発
- 販売と社会実装(フェーズ4・現在)









ブランドロゴ

『愉くらしの家』の『愉』をモチーフに、 メンバーの想いと特徴をロゴに表現 愉くらしの家の特徴である、

①木材を知り尽くした材木店の建てる家 ②伝統構法を用いた宮大工の建てる家 ③産学連携による地域活性化のための家

の3点を口ゴに表現しています。











サンブスギの地域産材としての再評価を行い、SDGsを含めた持 続可能な社会づくりのための価値を社会に発信している。学生の 視点でみた家づくりの手法や、その背景にある課題を改めて認識 した上で、マーケットインの発想で具体的な販売プロジェクトと

して実践的な事業を展開している。学生が考案した「愉くらし」の ロゴマークは各種販売媒体や看板等に活用されており、学生の提 案が実際の商品に採用される貴重な機会となった。

AIを用いた血液検査データからの保健師指導効果の可視化

木更津工業高等専門学校 情報工学科 准教授 大枝真一

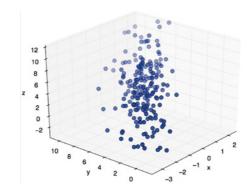
担当学生

木更津市役所 企画部 情報政策課、市民部 保険年金課 事業協働機関

平成26年度~平成28年度

事業概要

近年、オープンデータが注目を集めている。オープンデータとは、国や政府、 地方自治体が保有する地理空間情報や防災、統計情報といった公共性の 高いデータで、主に、信頼性向上、官民協働推進、経済活性化を目的として 行われている活動のことである。本研究では、木更津市から匿名の血液検 査データを提供していただき、通常十数項目存在する血液検査の項目を PCA (主成分分析) とGMM (混合ガウスモデル) を利用することによって 2次元グラフ上にプロットする。年度毎の変化を可視化し、厚生労働省に よって定められているメタボリックシンドロームの階層化基準に合わせて 個人を色分けすることによって、2次元グラフ上での健康者と不健康者を 表示することにより、保健師の指導効果の可視化を行った。

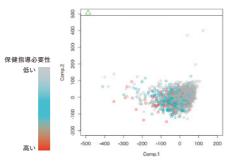


多次元データの次元縮退

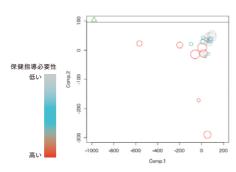


リスク1	リスク2		リスク3	対象者	皆年齢
内臓脂肪	高血糖	脂質	n±71 deres	40~	65~
蓄積リスク	高血圧	異常症	喫煙 	64歳	74歳
腹囲	上記2つ以上該当		考慮なし	高	
男性:85cm以上 女性:90cm以上	上記1つ該当		あり	[P]	
XE:000111X			なし		中
	上記3つ該当		考慮なし	高	
BMI: 25以上 腹囲は上記以外	上記2つ該当		あり	[P]	
	上記1つ該当		なし		中

血液検査データ



PCA (主成分分析) による可視化



GMM (混合ガウスモデル) による可視化

木更津市役所 企画部 情報政策課、市民部 保険年金課の協力を 得て、匿名の血液検査データの解析を行った。特に、20次元の多 次元データをAI手法の一つであるPCAとGMMを用いて2次元 平面上にプロットした。これにより、平成24年から平成26年の保

健師の指導効果の評価を行った。本研究成果は、平成28年3月 情報処理学会第78回全国大会(発表番号:7ZB-02)において、 優秀講演賞を受賞した。

適応学習型OCRによる手書き伝票の電子化および自動化

手書き文字認識により, 日付,名前を認識し, 画像データに自動的に IDが割り振られる.

いつでも、どこでも

閲覧が可能になる

担当教員 木更津工業高等専門学校 情報工学科 准教授 大枝真一 担当学生 小森一誠、秦優哉、川名晴也、髙橋大成、石井大成 事業協働機関 木更津商工会議所 医療・福祉・教育部会

事業期間 平成27年度~平成30年度

事業概要

日本では年々高齢化が進んでおり、介護の必要性が高まっている。特に、 訪問介護の需要は高く、今後も利用者の増加が予想されるが、解決しなけ ればならない課題が残されている。その一つとして介護記録の管理方法が 挙げられる。訪問介護の業務の一つとして、介護者は実施した介護の内容 や要介護者の健康状態などを紙の記録用紙に記入し、他の介護士と情報 共有を行っている。しかし、手書きによる記録用紙は電子化されていない ため、そのままでは利活用が困難となっている。そこで、この問題を解決す るため、CNN (Convolutional Neural Network) を用いた手書き文字 の認識による訪問介護支援システムを構築する。さらに、これまでに蓄積 された膨大な手書き伝票を電子化することにより、情報資源の有効活用 を試みる。



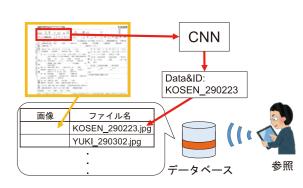
手書き伝票







手書き伝票の課題



システム詳細

適応学習型 OCR システム

木更津商工会議所医療・福祉・教育部会の協力を得て、実際の 介護現場で用いられる名字データを取得し、有効性の検証実験を 行った。その結果Ensemble LearningによるCNNを用いて確 実に推定できる画像を選別し、文字識別を行うシステムを構築し

CNNによる

スキャナで

読み込む

た。単一のCNNによる推定では95.3%の精度であったが全ての 画像が推定対象となるため4.7%が誤認識だった。Ensemble Learningを用いることで誤認識を含まずに97.2%を識別するこ とに成功した。

地域と連携した読書活動による〈コミュニティ〉の創成

担当教員 木更津工業高等専門学校 人文学系·国語科 教授 加藤達彦、講師 田嶋彩香

一般特別研究/一般特別セミナー受講学生(本科3年生) 担当学生

きさらづみらいラボ、勝手にきさらづ応援団ココカラ、市民団体、千葉工業大学

平成29年度~令和元年度

事業概要

青少年の活字離れおよびコミュニケーション能力の低下が叫ばれて久 しいが、そうした事態は特に工業系の学生が通う高等専門学校に顕 著な傾向として、近年、大きな教育課題の一つとなっている。その背景 としてインターネットの普及による活字文化の衰退や書店業界の低 迷、それに伴う読書量の減少等が挙げられるが、そこにはさらに各高 専が立地する地方都市における"コミュニティの弱体化"という社会的 な問題も胚胎している。郊外型の商業施設が次々と建設される一方、 駅前の商店街は衰微の一途を辿り中心市街地の空洞化が深刻化し、

子供から大人まで各世代が気軽に集い、交流できる身近な場(サード プレイス) が急速に失われつつある。読書に関する本事業は、こうした 高専に顕著な教育課題と地域社会が抱える問題とを合わせて解決す るべく本校で開設されているPBL型の授業と連動させ、地元の市民 団体とも連携しながら工学的・創造的な活動を通じて地域を活性化し ていくことを目指し、〈本〉というメディアが持つ新たな可能性を探ると ともに高専生の書物文化への関心とコミュニケーション能力の向上を

平成29年度

- 市民交流および世代を超えたコミュニ ケーションの促進方法の検討および実践
- みなまちライブラリーのシステム構築およ び市民へのプレゼン





平成30年度

- 地域社会の課題および地域文化の調査と
- 読書効果を高めるユニークな装置や玩具 等の製作





令和元年度

• 学校周辺の店舗からの協力を得てみなま ちライブラリーの増設





駅前の施設を借りて一日限定のブックイベント (みなまちブック フェス)を毎年企画・運営し、本と人をつなぐユニークな装置・玩 具等の製作や市民に向けたプレゼンを行った。同時にすでにそう した実績のある講師やアーティスト等を招いて講演会やワーク

ショップも開催した。また、イベントとは別に学校周辺の店舗から 協力を得て小さな本箱(みなまちライブラリー)を年度ごとに増設 した。これらの活動を通じて、学生たちの"コミュニケーション能 力"の向上と地域の活性化を実現することができた。

PBL事例:カラス被害抑制のためのロボットIoTの開発実証

担当教員 木更津工業高等専門学校 情報工学科 教授 栗本育三郎

担当学生 中村颯太、宮良大地、松田美勇史、門口雅志

事業協働機関 株式会社 CrowLab、シンガポール国立大学、宇都宮大学、木更津市地域情報化推進委員会

事業期間 平成28年度~令和元年度 (鳥獸被害対策計画中)

事業概要

「カラス被害抑制のためのロボットIoT」は、シンガポール国立大学および宇都宮大 学との共同研究として、平成28年4月に本校専攻科必修授業科目である問題解決 技法のテーマとしてスタートした。本研究は、カラス型ロボットにより、3Dプリンタ や情報技術を駆使して、生体の特徴を忠実に再現するというプロジェクトである。 情報工学科栗本育三郎教授の指導のもと、宇都宮大学の研究者にカラスの音声 データや解剖データを提供いただくとともに、カラスの動きの機構については、カ ラスの飛行について先行研究されているシンガポール国立大学の研究者とのディス カッションによって研究を進めた。



試作したカラスロボット「Cybernetics Crow」



総務省主催 高専ワイヤレス IoT 技術実証コンテスト アイデア賞



遠隔制御可能な「Telexistence Cybernetics Crow」

現在、人がワイヤレスによってカラスの視点で遠隔操縦するカラス 型ロボットIoTのプラットフォームが完成している。本研究内容は 文部科学省主催サイエンスインカレで奨励表彰、並びに総務省主 催高専ワイヤレスIoT技術実証コンテストでアイデア賞に輝いた。 令和元年度、コンテスト5G部門において遠隔制御可能な 「Telexistence Cybernetics Crowの開発」に採択され、継続 して開発実験を実施中である。今後、木更津市の協力を得て フィールドでの鳥獣被害対策を計画中である。

南房総市×千葉工業大学 産学協働地域活力創造推進プロジェクト

令和元年度 南房総市×千葉工業大学 産学協働地域活力創造事業

活動地域 南房総市白浜地区、千倉地区、和田地区、富山地区、丸山地区、南房総市役所内 他

参加学科 都市環境工学科、デザイン科学科、生命科学科、情報ネットワーク学科、プロジェクトマネジメント学科 他

海洋資源利活用 PJ

富山地区

【扣当教員】生命科学科 五明美智男教授 【担当学生】生命科学科 五明研究室所属学生 【事業期間】平成30年度~令和元年度

地域課題解決アプリ・システム開発 PJ

【担当教員】情報ネットワーク学科 中川泰宏助教 【担当学生】情報ネットワーク学科 中川研究室所属学生 【事業期間】平成29年度~令和元年度

地域創生活動の連携促進 PJ

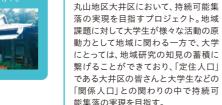
市役所内

【担当教員】プロジェクトマネジメント学科 関 研一教授 【担当学生】プロジェクトマネジメント学科 関研究室所属学生 【事業期間】令和元年度

シラハマ Lab.



学び舎「じんべゑ」



【成果】3年間を通じて、学び舎「じん べゑ|を活動拠点に、地域の課題解決

持続可能な集落創造 PJ

【扣当教員】都市環境工学科 鎌田元弘教授

【事業期間】平成29年度~令和元年度

のお手伝いをさせていただく代わりに、大学の調査に協力を していただくという地域と大学との関係の構築ができている。 昨年は、学生が地域のニーズを整理し、「どんど焼き」を実施 することができ、地域における関係人口としての学生の在り方 を形に示すことができた。当プロジェクトは、来年度以降も関 係人口が関わる「新たな持続可能地域」を体現すべく活動を 継続していく。

プロジェクトマネジメント学科 加藤和彦教授

【担当学生】プロジェクトマネジメント学科 加藤研究室所属学生

都市環境工学科 鎌田研究室所属学生



和田地区(安房拓心高校)

【担当教員】 プロジェクトマネジメント学科 久保裕史教授 【担当学生】プロジェクトマネジメント学科 久保研究室所属学生 【事業期間】平成30年度~令和元年度

若者と市民の交流促進PJ

市内全域

丸山地区

【担当教員】地域コーディネーター 青木秀幸 【担当学生】ボランティア参加学生 【事業期間】平成29年度~令和元年度

空き公共施設利活用PJ

白浜地区

【担当教員】 プロジェクトマネジメント学科 加藤和彦教授 デザイン科学科 大嶋辰夫准教授 情報ネットワーク学科 中川泰宏助教 【担当学生】プロジェクトマネジメント学科 加藤研究室所属学生 デザイン科学科 大嶋研究室所属学生 情報ネットワーク学科 中川研究室所属学生 その他各サークル参加学生

【事業期間】平成27年度~令和元年度

南房総市の空き公共施設(旧長尾小学校・旧白浜 観光案内所) などを利用し、市内在住の生徒・児童 向けの科学体験イベント「オープンLab」を実施し ているプロジェクト。平成30年度からは、同じ空き 公共施設を利活用し運営されている、R.project 様の白浜フローラルホールとのコラボ企画として



「わくわく科学技術体験講座」を多数の学内サークルと共に実施し、地域空き 公共施設の有効活用と地域小中高生の人材育成へと繋ぐ活動を継続している。

【成果】継続的な活動の中で、本学が独自に取り組んだ旧白浜観光案内所での 取り組み以外に、既に空き公共施設を利活用して取り組みを続けている、「シラ ハマ校舎」のWOULD様や「白浜フローラルホール」のR.project様などとも 連携した空き公共施設利活用によるイベント活動を実施する体制を構築する ことができた。当プロジェクトは、今後も千葉工業大学と地域との連携プロ ジェクトとして継続し、引き続き空き公共施設の有効活用面と人材育成を目指 した教育面の両面での活動を継続していく。

地域資源発掘(キンセンカ)PJ 白浜・千倉・和田地区

【扣当教員】デザイン科学科 赤澤智津子教授 プロジェクトマネジメント学科 加藤和彦教授 【担当学生】デザイン科学科 赤澤研究室所属学生 プロジェクトマネジメント学科 加藤研究室所属学生 【事業期間】平成29年度~令和元年度

日本一の生産量を誇る南房総市産キンセンカの 知名度向上を目的とし、加工商品、食用化商品 のパッケージやパンフレット、販売店舗のブース などに至るまでの、トータルデザインをプロ デュースすることで「南房総市カレンデュラ」と してのブランド化を目指すプロジェクト(カレン デュラ=キンセンカのハーブ名)。本年までにデ ザインの基本方針を決定し、現在は販売店舗の カレンデュラブースのデザインを手掛けている。



【成果】地域ブランドの確立へ向け、商品そのものから販売経路に至るまでの 調査を行い、平成30年までに基本方針の決定と一部商品のデザインを開始し ている。現在は販売ブース側のデザイン検討を継続している。また、来年度以 降も千葉工業大学と地域間での連携として、各種デザインの継続の他、本学の 先進工学部の協力のもと、加工製品であるカレンデュラオイルについて、成分 分析などを実施する予定となっており、科学的根拠を持った商品として更なる 知名度の拡大を目指す。

南房総市×千葉工業大学 若者と市民の交流促進PJ

担当教員 地域コーディネーター 青木秀幸

担当学生 ボランティア参加学生

事業期間 平成29年度~令和元年度

事業概要

地域における課題に対し、学生がボランティアとして 参加し地域の方と協働して課題解決の支援を行う 仕組みや環境の整備を目的に実施されているプロ ジェクト。

大学のボランティア単位取得制度と連携して実施を行うことで、継続して地域へ学生を 動員することができている他、1、2年生を中心に活動を行っているため、参加学生が 3、4年進級時に南房総市におけるゼミ活動や研究活動へステップアップする契機とし ても重要な役割を果たしている。令和元年度夏季ボランティアでは、南房総市千倉出 身の学生が参加し、地元の魅力の再認識やUターン志向の促進にも繋がっている。



台風15号被害への自主ボランティア

台風15号被害発生時には、 学生・教職員が自主的に ボランティアを実施した。



災害復旧の作業をしなが ら地域の人と関わる中で、 学生の更なる地域理解に 繋がる機会にもなった。

本プロジェクトのポイント

• 「圧倒的な間口の広さ」

多様な学生(平成30年実績4学部11学科)に 「地域での学びの場」を提供してきた

- ボランティア科目(選択必修科目)として 大学のカリキュラムの中で運用されてきた
- ・実施にあたり、本学学生課の理解と応援のもと 教職連携型で進められてきたこと

これらの点が他のPJにない

唯一無二のプログラムの特徴といえると考えられる

千葉工業大学の地域連携の成果と今後の展開

工学部、創造工学部、社会システム科学部の教員および学生、大学職員

御宿町の参加者 御宿町役場、御宿町教育委員会、御宿町商工会、御宿町町民

平成28年度~平成30年度

① ON19 サミット (おんじゅくサミット)

千葉工大の各学部学科の学生と御宿町商工会青年部の連 携により、御宿町の民宿に滞在して現地調査とワークショッ プを行い、御宿町の将来像について提言した。その活動は総 合戦略にも位置づけられた。

② 御宿こども工務店

御宿町の子供たちと千葉工大の学生がチームとなって多用 途で使える木製のユニットを作成。町の中で利用されている。

③ 御宿版 CCRC

御宿町における活動概要と成果

千葉工大がサポートして都市部 (浦安) との交流をサポート した。

④ タブレットの寄贈と活用

千葉工大の学生が使っていたタブレットを御宿の小学生に 寄贈した。その活用方策についてもサポートしている。



第1回 ON19 サミットの成果

進行を考えた。











第2回ON19サミットの成果

町の海岸側を実際に模型で表現した。 地形をよく知ることができた



模型を中心に、住民の方々と意見交換。 上り現宝的か話ができた



②実地調査 当日。午前中から実際に自分たちの足で 海岸側から山側まで散策。





御宿こども工務店





御宿版 CCRC

アメリカ 大学連携型 CCRC の事例 ニューハンプシャー州 ケンダル・アット・ハノーバー

(ダートマス大学) アメリカ版 (民間ベース)

•敷地内完結+高齢者中心+新規開発 日本版(公共ベース)

●町まるごと+多世代+ストック活用

御宿版 (そのまんま CCRC) コンパクトな農漁村+ 多世代・交流・元気な高齢移住者+ ストック・先端技術活用





27



千葉工大の拠点・子供と学生をつなぐ!

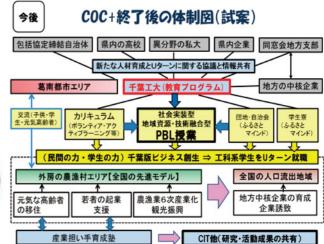


学生と科学技術が御宿をひとつにする!



千葉工業大学を地域課題解決の技術の聖地に!





包括協定市町の拡大による地域連携

圏央道

今後

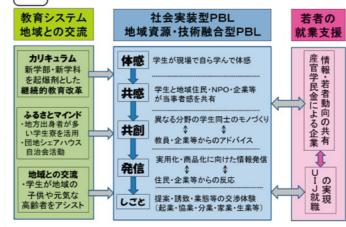
CIT卒業生

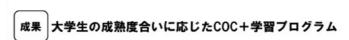
U · I · 19->

U・I・Jターン就職

我描字市







地域連携を通じた 教育カリキュラム

南房総市での地方創生プログラム案

関連計画:総合戦略(p13·1·

関連計画: 総合戦略(p16·19

地域ニーズに対する学生シーズを活かした地域課題解決 学生による社会実装 科学技術を用いた若者の仕事づくりプロジェクト(基本目標1・2) SILAB等の教育プログラム ・重点プロジェクトに応じた小さな拠点づくり(ぎキ目標・2)【子育て支援・医療福祉・一次産業・観光業など】

学生の興味を見つける

3・4年生・大学院生 【特に意欲的な少人数の学生】

学生シーズを活かした若者のチャレンジ支援 ・若者が活躍するための拠点づくり[FURUSATOサテライトキャンパス] 地元の若者との交流・連携事業[仮称:南房総地方創生塾] →若者のチャレンジを通じた地域の新たな体制構築

大学生等の若者の活躍と異世代との交流の機会の創出 市民団体等及び既存の小さな拠点での若者の活躍の機会の創出 ▶科学技術を用いた若者の視点からの南幕総市のPR及び情報共有 →学生ボランティアと科学技術を通じた地域ネットワーク強化

東葛農漁村エリア 千葉工業大学 Ⅰ・ Jターン就職 報共有・支援の範囲 葛南都市エリア 千葉市 加市川市 **道**浦安市 会船橋市 Funabashi City 習志野市 メキシコ・諸外国へ 南房農漁村エリア 香取市 30八街市 ❷ 御宿町

傍 勝浦市

🔭 南房総市 ----

加九十九里町

通々井町

学生商社マンの育成による地域商品開発と販路開拓の取り組み

危機管理学部 木村栄宏教授 担当教員

前田和輝、安住直哉、大川卓美、福島涼太、柳澤佑人、吉田俊哉 ほか木村ゼミナール 担当学生

事業協働機関

平成28年度~令和元年度 事業期間

事業概要

銚子は、他地域と比べても大変豊かで魅力的な地域資源に恵まれてい るが、必ずしもその恩恵は町全体に行き渡っていないのでは、という問 題意識から、その解決に向けて、学生が地元のNPOちょうしがよくな るくらぶと共に試行する取り組みである。

銚子の地域資源を横串でつないでいく役割と、その利益を一旦行政に 預けて、そこから市民に福祉や医療・教育という形で分配していく役割 を「地域商社」とし、それを担う人材として千葉科学大学の学生を「学 生商社マン」として育成することと、販売した商品の利益がなるべく行 政の財源増につながることを目論み、「ふるさと納税」の返礼品として 流通していくこと。これらを通じて学生の社会実践力が向上することを 期待し、「プロジェクト学習」科目の中で本プロジェクトが立ち上がっ た。平成28年から始まり、平成29年に「もしものおまもり」、平成30 年からは「銚子の涼しい夏」等のコンセプトによる地域資源をセットに したふるさと納税返礼品の開発、さらに危機管理学部の学生という特 性を生かして防災用品の開発も行ないつつあり、地域商社としてこれら の品々の販路拡大に取り組んだ。

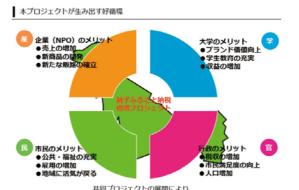
子ども用防災商品の開発

天災などの非常時に、子どもが安心して親の迎えを待てるようにと開発され た防災キット。子ども用の手袋やマスク、携帯トイレなど6つのアイテムを詰 めた"もしもの道具"、食糧や水を入れた"もしものごはん"、二次災害から身 を守る情報や親からのメッセージを挿入した"もしものてがみ"の3つがお まもり型のナップザックにセットになっている。漁港の街・銚子との親和性 も高い伝統の和柄・鱗を防災色のオレンジで彩るというコンセプトでデザイ ンし平成29年度のグッドデザイン賞も受賞した。この商品も、学生商社マ ンの力を活用しながら、銚子市のふるさと納税返礼品として紹介していく。









共同プロジェクトの展開により、 「千葉科学大学が銚子にあって良かった」という好循環が生まれます。

機能性表示食品の開発

銚子の代表的水産資源である鯖に含まれているDHA/FPAの持つ 「中性脂肪を下げる」という効果に着目し、その貴重な脂分を外に逃 がさない形で製造されている「缶詰」という形式を採用することで、銚 子初の「機能性表示食品」を目指して開発した。機能性の立証に関し ては薬学部の複数の教授陣で「システマティックレビュー」という形 で行った。この商品も、学生商社マンの力を活用しながら、銚子市初 の防災商品として紹介していった。



銚子の豊富なモノ・コト資源と我々千葉科学大学の学生の知恵と アイデアを掛け合わせて、世の中の人々に喜ばれる商品を開発し、 それを販売することで、町と大学が共に持続可能な運営ができる ようにする一歩となりつつある。

実際にふるさと納税返礼品としてどの程度普及するか、そしてこの 活動の継続性確保等を今後の課題として取り組んでいきたい。

銚子市におけるアライグマ・イノシシの生息状況調査と被害対策

担当教員 危機管理学部 澁谷未央講師・加瀬ちひろ講師 (H27~H30 実施者)

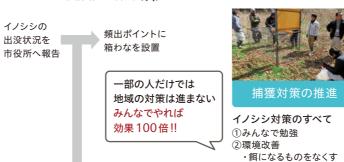
担当学生 事業協働機関 銚子市

事業期間 平成27年度~令和元年度

事業概要

銚子市はキャベツやダイコンを中心に農業が盛んな地域だが、これまでイノシ シやアライグマの生息は確認されておらず、ハクビシンやカラスによる食害が 生じているものの大きな問題にはされてこなかった。しかし平成26年度の調 査により、個体数密度は低いもののアライグマの生息が銚子市内で確認され、 平成28年度の調査によりイノシシの定着(繁殖)が長山町周辺地域で確認さ れた。アライグマによる被害は報告されていないが、イノシシに関してはトウモ ロコシやサツマイモの食害、キャベツやダイコンの踏みつけ被害が発生してい る。市内のアライグマおよびイノシシの分布はこれまでの調査結果では局所的 であったが、分布が拡大している可能性が高く、農業や衛生環境、生態系へ及 ぼす影響が危惧される。そこで本プロジェクトでは、神社仏閣での爪痕調査や 農地での自動撮影カメラ調査などにより、アライグマおよびイノシシの現在の 生息状況を明らかにし、市役所や農業事務所、地域住民との情報共有を実施 し、今後の農作物被害の軽減・防除を図ることを目的としている。

イノシシ生息情報の活用



地区毎にイノシシ

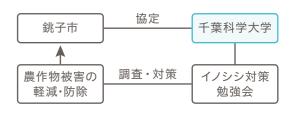
(平成28年~29年:7地区)

勉強会を開催

④駆除(大きいイノシシを獲る) 正しい知識の普及 対策の啓発

・隠れ場所をなくす

③ 柵で囲う



平成27年度

- 分布状況一斉調査
- 防除のための基礎情報提供

平成29年度

- 生息状況調査
- 地域への普及啓発活動と野生動物管理

令和元年度

- 農作物被害の軽減・防除に関する調査研究
- ●生息状況調査(継続)





令和元年 自動撮影カメラ設置

平成26年 生息確認・特定外来生物

農業者への被害状況アンケートでは、アライグマの存在を意識し たことがなく、なんらかの被害があっても他種によるものであると いう認識をしていた。これらのことから、農業者や地域住民に対し て市内のアライグマの生息状況と対策について普及啓発を行う必 要があると考えた。イノシシについては、当初の分布域から個体が 分散していることが分かり、市内では局所的な問題であると認識 されていたが、全域での対策が必要であることが明らかとなった。

調査により得られた情報は市や関連団体と共有し、イノシシ捕獲 用の箱わなの設置場所の選定を行うなど、地域の野生動物管理 に役立てている。また、地域住民に対しては、特に農作物被害が 懸念されるイノシシについて、市内の生息状況と正しい対策方法 について勉強会を開催し、普及啓発に取り組んでいる。これまで に7つの地域にて勉強会を開催しており、今後も引き続き実施し たいと考えている。

犬吠埼温泉の新価値創出

千葉科学大学 薬学部 平尾哲二教授、山下裕司講師、危機管理学部 手束聡子講師

担当学生 事業協働機関 銚子市

平成27年度~平成28年度

事業概要

銚子市の犬吠埼地区には、掘削場所が異なる3種類の源泉を活用す る5軒の温泉宿泊施設が営業し、これらの温泉は肌がしっとりする、 身体が温まるなどとして利用客の好評を得ている。本取り組みでは、 千葉科学大学の化粧品化学研究および水環境研究グループが中心と

なり、銚子市および犬吠埼温泉協議会と連携し、銚子市の観光資源の ひとつである犬吠埼温泉の価値をさらに高めることを目的に源泉の 科学的効果の検証を行った。





平成27年度の成果

【源泉の成分調査および皮膚保湿試験】

- 3種類の源泉は全てナトリウムと塩化物の濃度が高い海水を 起源とする温泉であった
- 掘削場所によって主成分および微量成分が異なり、各源泉の 肌への保湿効果も異なっていた

保湿効果有



犬吠埼ホテル「黒潮の湯」

平成28年度の成果

【源泉の¹⁴C 年代測定 】

源泉	犬吠埼ホテル 「黒潮の湯」	犬吠埼観光ホテル 「潮の湯」	太陽の里 「屏風ヶ浦温泉」		
14C年代	10,020±80年	11,320±80年	21,930±100年		

1~2.2万年前の 化石海水型 温泉

上記の成果は、犬吠埼温泉研究結果発表会(平成28年5月24 日、平成29年5月30日開催)にて公表した。また、研究成果の 一部は千葉科学大学紀要第10号 pp.15-22 (2017)、第11号 pp.25-30 (2018) に掲載された。さらに、犬吠埼温泉協議会で

はパンフレットや宣伝広告に"保湿効果"や"化石海水"などの研 究成果を表記したり、横断幕を作成し銚子電鉄犬吠駅に掲げたり し、観光客のさらなる誘致に向けた取り組みを行っている。

行政・関係者との協働による「まちの保健室」

担当教員 看護学部 安藤智子教授、村山より子教授、市原真穂准教授、城戸口親史准教授、吉野由美子准教授 ほか

担当学生 波多野祥吾、中嶋晴香、沢田明花、山本彩乃、細田雅乃、堀越加奈ほか

事業協働機関 銚子市

事業期間 平成29年度~令和元年度

事業概要

「まちの保健室」は、看護職が住民の健康を支援する場であり、日本看護協会や看護系大学が 主催して全国的に開催されている。本学では、地域の潜在的な健康ニーズの把握および支援を 行うとともに、学生の看護実践能力向上を図ることを目的に平成29年度から開始した。平成29 年度、30年度は本学のエクステンションセンター、令和元年度はイオン銚子を会場に月1回、年 6~7回、日曜日の午後に実施している。銚子市地域包括支援センター、認知症予防トレーナー等 との協働によるプログラムも設け、内容の充実を図ると共に、まちの保健室終了後のサポートにも つながるようにしている。1回のスタッフは、教員1~2名、雇いあげ看護職1~2名、ボランティア 学生4~6名である。周知方法は、広報と地方紙での周知および会場で呼び込みを行っている。 内容は、毎月異なるテーマのプログラム、健康相談、看護師復職相談を同時に開催している。



図1 認知症予防プログラムに参加したスタッフと学生

表1 平成30年度のプログラムと参加数

日 程	プログラム	参加数	教員数	学生数
6月17日	認知症予防	21	2	4
7月15日	はじめの一歩 兵児帯体験	親子14組	3	7
9月16日	認知症ケア	20	2	7
10月21日	アロママッサージ	33	2	8
11月18日	家庭でできる救急法	5	1	6
12月16日	こどもと遊ぼう クリスマスカード制作	親子3組8人	2	2
1月20日	ストレスチェックと対策	21	4	0
	合計	122	16	34

図2 参加者の満足度

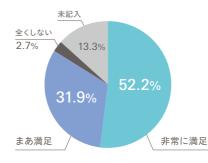


表2参加した学生の評価

項目	A	В	С	D	未
健康増進・疾病予防のための知識が増えた	8	9	0	1	
健康増進・疾病予防のための技術が向上した	6	9	2	1	
住民に対するコミュニケーション技術が向上した	7	11	0	0	
住民に対する援助に自信が持てるようになった	4	10	4	0	
チームの一員としての役割を主体的に発揮できた	7	10	0	0	1
地域に出向いた看護活動の手法の理解が深まった	8	8	2	0	
看護士・保健師の専門性に対する理解が深まった	10	8	0	0	
自分の課題に気が付いた	7	10	1	0	
住民に喜ばれ、達成感・喜びを感じた	10	8	0	0	
ā†	67	83	9	2	1

参加者の満足度は高く「プログラムが良かった」、「学生や教員の 態度がやさしく良かった」という意見が多くみられていた。また、 平成29年度は担当教員が公衆衛生看護分野のみであったが、平 成30年度から5分野の教員が参加し、各専門分野の知見や技術 が提供され、プログラムが充実した。

平成30年度は、ボランティア学生を全ての学年に拡大して公募し、 平成29年度から20名増加した。学生の参加後の評価から、学生 への教育的効果も見られた。認知症ケアプログラムに参加した市 民が、地域包括支援センターの協力で「認知症カフェ」を開催する という波及効果も見られた。

南房総 子育てサポーター育成プロジェクト

保育科 阿部真美子教授、藪中征代教授 担当教員

保育科 学生ボランティア (講座・研修会補助) 担当学生

南房総市子ども教育課 事業協働機関 平成29年度~令和元年度

事業概要

南房総市においては、2歳以下の子どもの65%が家庭等で保育されている。 他方で、少子化や子育て家庭の核家族化が進行し、さらにひとり親家庭は増 加傾向にある。すなわち、同市では家庭および地域の教育力が低下する中で、 親の育児不安・ストレスの増大、児童虐待の増加、地域における子育て家庭の 孤立などが子育て支援をめぐる重要な課題となっている。しかし、家庭等で保 育される3歳以下の子どもについて、市の「子育て支援センター」を利用する 保護者は36.8%にとどまる(南房総市『南房総市子ども・子育て支援事業計 画』、平成27年)。この要因としては、子育てに関する多様な情報が氾濫する一 方で、必要なタイミングで適切な情報が保護者へ提供されていないこと、近隣 に拠点となるような施設が少ないことが考えられている。そこで、本プロジェク トでは、聖徳大学短期大学部保育科と南房総市子ども教育課の連携・協働の もとで、地域の子育て家庭へ子育て支援の情報を提供し、「地域の子育て・親 育て」を支援した。その具体的事業として、子育てサポーター講座や保育者研 修会の開催がある。

平成30年度

「おうちで游ぼう!

• 子育てサポーター講座

平成29年度

子育てサポーター講座・ 保育者研修会 「気になる行動の 理解と対応し

カンタンふれあい遊びし • 保育者研修会 「子どものからだ・ 心のトラブルの理解」 (2回)





令和元年度

(2月実施予定)

保育者研修会

•子育てサポーター講座

(災害のため実施保留中)

南房総市 子ども教育課 連携・協働

聖徳大学 短期大学部 保育科

子育てサポーター 講座

保育者研修会



保育科における「産学共同地域活力創造事業」平成30年度事業報告

1. 子育てサポーター育成

1. 十百「ワホーツー育成本学院にて実施している「子育てサポーター講座」の"南房総市版"として平成30年から開始した事業である。本事業は、子育で中の保護者、祖父母 や子育て支援員を対象とした「学び」の機会として開催された。

(1) 講座名: 「おうちで楽しもう! ―カンタンふれあい遊び」

(1)講座名:「おうちで楽しもう!—カンタンふれあい遊び」 (同時:平窓の9年9月10日(月) 場所:千寮で支援センターほのぼの) 本講座の参加者は、子育て中の父母や祖父母、子育て支援施設の職員等の 南房総市民が中心である。本講座では、まず、「家庭おいて親子で遊び大切さ」 について講義の形で強調した。そして、「家庭で子もとどう遊んでいいのかわか らないという保謝者もの声に対して、具体的なふれおい遊びを紹介した。 また、同講座には本学保育料の学生(1年生6名)がボランティアとして参加した。学生は、講座では参加した市民の子どもたちへ絵本の読み関かせや手遊び などを行うことで、保護者等の学びを支援するとともに、学生・市民の交流を図っ た。また、A内もい変がの紹介においては、連続とりまに幸楽し、カンタンふれあ 、また、A内もい変がの紹介においては、連続とりまに幸楽し、カンタンふれあ た。また、ふれあい遊びの紹介においては、講師とともに実演し、「カンタンふれあ

本講座の成果について、子育て支援施設の職員から以下の意見を受けた ①学生と子どもと遊んでいる姿が、今後の子育て支援施設にとても参考になった。 ②子育てという営みについて改めて考える機会が得られた ③今後の南房総市の子育てについて考えるとても有意義な機会となった。



南房総名産品創出プロジェクト

総合文化学科 山﨑正也教授、長谷川弓子講師 扣当教旨

平成29年度(川口夕里奈、佐藤綾花、田畑桃佳) 平成30年度(阿部詩央梨、佐藤理子、戸高春香、沼崎早香) 担当学生

令和元年度(秋本真邑、大坪美聖、葛城七瑛、山本怜奈、吉田有希)

事業協働機関 南房総市農林水産課、そてつ農園、有限会社アルガマリーナ、株式会社たんぽぽ農園

平成29年度~令和元年度 事業期間

事業概要

南房総市の豊富な海産物・農産物を活用した加工品や食品を開発・商品化 し、新しい名産品を創る事業である。平成29年度は、「そてつ農園」と連携・ 協働して、あじのそぼろを利用した「万能さんが焼きそぼろ」を開発した。平成 29年4月から開発に着手し、秋に開発、平成29年11月に本学学園祭で試食・ アンケートを実施した。平成30年2月に南房総市のとみうら元気倶楽部で行 われた「第2回南房総名品づくりグランプリ」で発表し、敢闘賞を受賞した。平 成30年度は、食品加工所有限会社アルガマリーナと協働で、燻製した鯖を利 用した商品「鯖燻アヒージョ」を開発した。平成30年6月末から開発に着手し、 平成30年11月に本学学園祭で試食・アンケートを実施した。平成31年2月の 「第3回南房総名品づくりグランプリ」で発表し、準グランプリを受賞した。さら に、令和元年7月に開催された全国大会「にっぽんの宝物 JAPAN グランプリ」 では、地域創生部門で準グランプリを受賞した。令和元年度は、株式会社たん ぽぽ農園と連携し、さつまいもを用いた商品開発を行った。株式会社たんぽぽ 農園の方が来校し、学生・教員と協働で試作と味の評価を行い、製品の形状や 材料を確定した。名称は「芋棒」(芋あんスティックドーナツ)で、11月の「第4 回南房総名品づくりグランプリーで、ベスト食べ歩き賞を受賞した。

協定 聖徳大学 南房総市 短期大学部

> 南房総市の食品加工会社・農園 平成29年 そてつ農園 平成30年 有限会社アルガマリーナ 令和元年 株式会社たんぽぽ農園







平成29年度 そてつ農園と 「万能さんが焼きそぼろ」を共同開発 平成30年度 有限会社アルガマリーナと 「鯖燻アヒージョ」を共同開発

令和元年度 株式会社たんぽぽ農園と 「芋棒」(芋あんスティックドーナツ)を 共同開発

子育てサポーター講座では、たとえば平成30年度には「おうちで 遊ぼう!カンタンふれあい遊び」を開講した。保育者研修会では、 同年度に子どもの心身両面におよぶ二度の研修会(子どもの感染 症およびアレルギー、子どもの心理と成長発達の促し)を開催し

た。以上の事業を通じて、地域で子育てをする保護者の「育ち」お よび不安軽減を助長すべく子育ての情報を提供した。また、前者 では開講施設(子育て支援センター)の周知と利用推進も図った。

地域の名産品を活用して、新たな商品開発を行うことができた。 商品開発の過程では、試行錯誤する場面も数多くあったが、「南 房総名品づくりグランプリ」で3年連続して賞を頂くことができ、

達成感を感じることができた。南房総市に出向いたり、企業や農 園等、関係者の方々と話をする機会を頂き、南房総市の魅力を直 に学ぶことができた。

南房総 昔物語の絵本制作プロジェクト

担当教員 総合文化学科 碁石雅利教授、正道寺康子教授

文芸・編集、文芸・メディア、図書館司書ブランチ、図書館司書・ITコース (1・2年計48名) 担当学生

事業協働機関 南房総市

平成29年度~令和元年度

事業概要

南房総市に残る昔話・民話の調査に基づいて作成した絵本を南房総市内の小 学校や幼稚園・保育園などに寄贈する取り組みである。聖徳大学短期大学部 総合文化学科教員の持つ知識と技能、学生の活力と創造力とによって制作さ れた絵本を通して、南房総市の子どもたちの郷土への関心や郷土愛の向上を 促すとともに、地域活性化の一助として資することを目的とした。そこで、南房 総市在住の昔話研究家、生稲謹爾氏の著作『南房総市の昔話第1集』(平成28 年、NPO富浦エコミューゼ研究会)に分類された富浦以下7地区の昔話から それぞれ選定し、絵本化した。事業期間3か年に合計24作品が仕上がり、平 成29・30年度作成分はすべて市内の幼稚園・保育所・小学校などへ贈呈した。 また、令和元年度分は既に制作を完了し、年度内に配布する予定であり、併せ て紙芝居化も行った。なお、平成30年10月には千葉工業大学とのコラボによ り、絵本の読み聞かせなどをシラハママーケットにおいて実施した。

幼稚園・保育所・小学校など



南房総市役所市民課

提供

総合文化学科絵本制作チーム

令和元年度 9作品1200部

平成29年度 7作品1400部





平成30年度 8作品1600部









事業期間中に7地区24作品および紙芝居4点を制作することが できた。絵本を読んだ子どもたちが成長した後、所期の目的が達 成されていることを願う。絵本の制作面では、描画・文章作成な どの過程において、それぞれに創造力が養成されたものと期待

される。だが、生稲氏の著書に依拠することに終始し、類書の調 査研究不足が課題として残る。今後、紙芝居を有効活用する手立 てを市当局とともに考えたい。

房州うちわの魅力再発見プロジェクト

担当教員 総合文化学科 松村正明教授、花見保次兼任講師、對比地勝兼任講師

池田知広、角谷愛友、佐藤夏海、髙橋美咲、廣田沙也佳、松沢若菜、山中恵、鷲尾美咲 担当学生

小出沙希、佐藤美琴、眞下波奈、大平雅音、川原千弦、佐藤奈々子、舟橋奈都未、堀井琴野

事業協働機関 南房総市

平成29年度~令和元年度 事業期間

事業概要

南房総市には、長い歴史と高い技術に培われた「房州うちわ」があり、匠の技として経済産 業省から伝統的工芸品に指定されている。しかし、生活様式の変化に伴い、うちわの生産 と職人さんの減少が問題視されている。聖徳大学短期大学部総合文化学科の教職員と学 生が持つ知識と感性を活かして、「房州うちわ」の魅力を再発見し、市の地場産業振興に貢 献するため、平成29年度より南房総市と本学とのCOC+事業の一環として協働による多 様な取り組みを行ってきた。平成29年度では「房州うちわ」の現況や工程、課題等を調査 した。うちわに関する問題・課題は、人材、販路、デザインの3点であり、本学が活動できる ところは、デザイン制作であると確認し、「和」、「南房総市の自然」、「縁起物」、「イベント (例:東京オリンピック)」など、各自がテーマを決め、学生の目線での商品づくりを目指し て、ベースとなるデザイン制作を行った。平成30年度ではアンケート調査結果等を踏まえ、 若者も手にしたい房州うちわをコンセプトに、デザイン企画を行い、市場リサーチやネット リサーチ、アイディア発想ワークなどを行い、「伝福連携」を推進するため、更に工房を見学 し、工程を学ぶなど、総合的なデザイン制作を行った。令和元年度は都市部でのうちわの 展開を図るため、女性目線で新たにデザイン制作したうちわを聖徳祭等で発表した。

平成29年度

現況調査・工程分析 基礎デザインの作成 アンケート調査

平成30年度

市場やネットリサーチ 付加価値向上の検討 伝福連携の会との協働

令和元年度

女性目線でのデザイン 都市部での横展開 浴衣とのマッチング

南房総市

聖徳大学 短期大学部

房州うちわ伝福連携の会

うちわのデザイン制作・ アンケート調査等









聖徳大学と南房総市および房州うちわ伝福連携の会が連携して デザイン制作に取り組むことにより伝統的工芸品の手作りの素晴 らしさを理解するとともに、「ものづくり」の難しさを体験できた。

行政の部局横断的な活動にも参画でき、アウトカムの指標で自己 の活動を評価する基礎を習得できた。

新たな門出応援プロジェクト「幸せなカップル誕生にエール」

担当教員 総合文化学科 菱沼久恵助教 事業協働機関 南房総市 事業期間 令和元年度

事業概要

南房総市は、温暖な気候を活かしたアイリス、キンセンカ、カーネーションの花栽培の生産量が日本一である。 この一帯は森林セラピー基地に認定されながらも過疎化地域として深刻な問題も抱えている。市から婚姻届け を提出した二人に「新たな門出を祝うための企画」を考えたいとの提案があり、市を象徴する花をモチーフに アートフラワーの技法によるブーケの製作に取り組んでいる。





教 育

全学共通教育プログラム「地域産業イノベーション学」

マイナープログラム(副専攻)

設置 平成28年4月

目的 グローバルな視点で地域産業をイノベーションする専門能力を有する人材を育成

概要 普遍教育科目+専門教育科目

プログラムの概要

平成28年度より、地域産業をイノベーションするグローバル人材を育成する全学共通教育 プログラム「地域産業イノベーション学」を開始した。普遍(教養)教育科目と専門教育科目 を横断して構成され、修了証書取得要件に示された30単位を取得した学生は、卒業時に修 了証書が授与される。

地域産業のイノベーションのための取り組みは、対象とする農林水産業、観光業、メディカル 連携ごとに複雑で高度な条件がある。学生が所属する専門課程の専門能力を有しながら、そ の専門技術・知識を生かすために、基礎的な地域に関わる知識・教養/ステークホルダー主 体の民主的な合意形成のための課題の把握力/課題解決構想力/経営改善能力/プレゼン 折衝能力/倫理意識等の専門能力を学習する必要がある。その学習にあたってはアクティ ブ・ラーニング型授業を多く取り入れる。



普遍教育科目

地域と暮らし(地域コア) (必修)

講義·体験型科目 教養展開

PBL·実習型科目 教養展開(地域コア関連)

地域づくり、地域産業、イノベーションの基礎・理論、地域と地域再生の基礎・理論、スキル、体験を学ぶ



専門教育科目

所属学部・他学部の指定する専門教育科目 すべての学生が履修できる全学共通科目がある

履修状況

平成28年度から登録を開始し、令和元年度までで56名の学生 5名、園芸学部11名、国際教養学部11名、工学部4名、文学部7名、 が履修登録している。学部の内訳は、法政経学部16名、教育学部 理学部1名、看護学部1名となっている。

エアポートNARITA地域産業学

サティフィケートプログラム (副専攻)

設置 平成28年4月

///// 敬愛大学

目的 成田国際空港や関連ビジネスで活躍できる人材を育成

概要 基本科目+空港ビジネス科目+地域産業科目+実践科目

プログラムの概要

平成28年4月にサティフィケートプログラム「エアポートNARITA地域産 業学」を設置した。これはこれまで4年生を対象として実施していた就職支 援プログラム「成田で職をゲットプログラム」を大きく改革し、サティフィ ケートプログラム (副専攻) として設置したもので、履修証明書取得要件で 定めた単位を取得した学生に履修証明書(サティフィケート)を発行する。 学生の主専攻である学部での専門性をもちながら、観光・物流・サービス 等に関する幅広い教養と知識・汎用的なスキル("チバイチバン"力)を備 え、成田国際空港に関連するビジネスで活躍できる人材を育成する教育プ ログラムである。更にこのプログラムを全学的に推進し、学生支援、成果の 把握を目的とした「エアポート NARITA 地域産業学」 指導員を配置してい る。指導員は、プログラムへの参加アドバイス(履修・目標指導)、状況確認 (学修・目標到達度合い確認)、成果把握(学修成果・プログラム改善)等を 行う (PDCA)。また、最終的には、サティフィケートプログラムにて履修・ 学修した内容・成果等を記載した「人物紹介書(仮)」を発行し、履修証明書 のエビデンスとして、学生の就職活動を後押しする。



卒業生の声

成田国際空港ラウンジスタッフ(グランドスタッフ) 国際学科 平成27年卒業

*取材当時。現在は外資系エアラインで客室乗務員として勤務。

成田空港のスイートラウンジでファーストクラスやビジネスクラスがら定時運航の大切さを痛感しています。いろいろなお客様に対 もアップするよう、寛ぎの時間のご提供を心掛けています。とくに の上達にも努めています。 ビジネスのお客様方は運航状況を気になさいますので、今さらな

のお客様方への対応を任されています。日本滞在の印象が少しで 応できるよう、忙しい勤務の合間にスカイプなどで第二外国語力

後輩の皆さんへの メッセージ

航空ビジネスで活躍することが小さいころからの夢でした。 キャンパスで積極的にチューターを務めた経験も、チーム オーストラリアに語学留学した経験が英語力をさらにアップ ますから、皆さんも夢は絶対に諦めないでください。 させるきっかけになりました。また、1年生の時からオープン

大学時代は英語・英米文化を中心に学びましたが、春休みに ワークの多い今の仕事に役立っています。努力は必ず報われ

エアポートNARITA地域産業学

本プログラムは、「基本科目群」「空港ビジネス科目群」「地域産業科目 群」「実践科目群」に分かれており、空港で活躍するために必要な能力 や知識を身に付けることが出来る。

1年次では、空港ビジネスや航空業界全体の基礎知識を身に付け、 2,3年次では専門分野を深めたのち、インターンシップで現場を体験 する段階立てたカリキュラムを組んでいる。それと並行して、TOEIC® を視野に入れた英語力の強化や海外の文化や語学に触れられる海外 スクーリングも経験できる。

国際学部 織井啓介教授(空港ビジネス担当)

サティフィ	ケート・プログラム「	エアボー	· NA	RIT	A地	域産	莱学	2]開	講科	ŀĒ
			10 (4	學能			16.9	76		*
区分	料日名	2019年度 2714 1 20	開議年次	M 12	场了要件	2019年度	開講を文	# 12	他了英件	20
	TOEIC [®] 向上講座1		2	2		0	1	2		
	TOEIC*向上講座II		2	2		0	2	2		
	ビジネス英語	×	-	-		0	2	1		
	ビジネス英語上級	×	-	-	ず	0	3	2	ず	
	ビジネス英語目		2	1	れか	×	-	-	いずれか1科目必億	
基本	ビジネス英語N	0	2	1	鞋	×	-	_	暮	
	スカイブ英会話!		1	1	料目必要	0	1	1	188	
	スカイブ英会話目	0	1	1	79.	0	1	1	19.	
	入門ツーリズムI	0	1	2		0	1	2		
	入門ツーリズム目	0	1	2		0	1	2		
	世界を知る	0	1.	2		0	-1	2		
	空港ビジネス		1	2	必修	0	1	2	必修	
	流通経常論		2	2		0	2	2		
	マーケティング論	0	2	2		×	_	-		
	Marketing Management		2	2		×	_	-		
	マーケティング	×	-	-		0	2	2		
ofo 2#	ホスピタリティ		1	2	必修	0	1	2	必修	
空港	国際金融論	×	_	-		0	3	2		
ビジネス	国際金融論]		2	2		×				
	国際貿易論	0	2	2		0	3	2		
	海記·会計概論I	0	1	2		×	-	-		
	海記会計基礎!	×	_	-		0	2	2		
	エアライン論	0	2	2		0	2	2		
	航空物流論		3	2		0	3	2		
	地方財政論I		2	2		0	2	2		
	地方財政論目		2	2		0	2	2		
	地域企業経営論		2	2		×				
	千葉県の産業と行政		2	2		0	2	2		
	地域產業論	0	2	2		0	2	2		
	中小企業論[2	2		0	2	2		
地域産業	中小企業論Ⅱ		2	2		0	2	2		
心况压未	ベンチャービジネス論	0	2	2		×	-	-		
	観光事業論 I	0	2	2	必修	0	2	2	必修	
	観光事業論Ⅱ		2	2	必修	0	2	2	必惟	
	旅行ビジネス論		2	2		0	2	2		
	地域観光論		2	2		0	2	2		
	経営立地論	0	2	2		0	2	2		
	ホテル・ビジネス論		2	2		0	2	2		
	キャリア基礎開発1		3	2		0	3	2		
	キャリア基礎開発ロ	0	3	2		0	3	2		
ch 08	インターンシップ1	0	3	2	必修	0	3	2	必修	
実践	インターンシップⅡ		3	2		0	3	2		
	敬愛プログラム		1	2		0	1	2		
	海外スクーリング[0	1	2		0	1	2		
	海外スクーリングⅡ	0	1	2		0	1	2		

受講者数

		平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度			
経済学部	男	9	4	2	8			
社归于即	女	0	2	1	0			
国際学部	男	7	20	25	17			
四下子叫	女	14	17	27	23			
合計		30	43	55	48			

各科目群の目標

基本科目群

ビジネス (実践) 英会話力の向上。TOEIC®600点。

空港ビジネス科目群

空港・航空の運営、物流、サービス等の職業と それらに必要な知識の習得。

地域産業科目群

成田国際空港を地域産業として捉え、地域や中小企業と 産業の関わりや活性化について考える。

実践科目群

得た知識、立案した計画を実践するために必要な 能力を身に付ける。"チバイチバン"力の向上。

インターンシップ

3年次のインターンシップは、本プログラムの必修科目とし て設定している。成田国際空港に関連する企業での実習 (5日間以上)は勿論のこと、4月から7月末までの事前指 導15コマ(企業・仕事研究や目標の設定など)、9月中旬か ら10月末までの事後指導6コマ(実習の振返り、まとめ、 発表資料作成)、10月末に実習先企業をお招きしての報告 会を全て行うことで、インターンシップ科目認定としている。

成田国際空港、ジェットスター・ジャパン、 ヒルトン成田、東武トップツアーズ、





正規科目授業(ホスピタリティ論・エアライン論)について

担当教員 国際学部 織井啓介教授、中西絵美特別講師

担当学生

事業協働機関 成田国際空港株式会社、ジェットスター・ジャパン株式会社ほか空港・観光関連企業

概要

空港で働くための基礎知識を身に付ける!

ホスピタリティ論では、自文化と異文化理解などを通してホスピタリ ティの基本を学び、日常場面や空港、航空事例を通してホスピタリティ を体得する。受講生が主体的に行動し、様々な場面で応用できるホス ピタリティの実践に繋げていくことを目標としてきた。

航空輸送は「旅客」「貨物」の分野に分けられ、各分野で多くの人・部 署が連携し安全運航を支えている。エアライン論では、航空事業全般 の仕組みを学び、エアライン業務の基本を理解し、航空、空港業界で 必要な多様な文化や価値観に対応できる力を養成してきた。

基本

TOEIC®向上講座、ビジネス英語、入門ツーリズムなど

空港ビジネス

空港ビジネス、ホスピタリティ、エアライン論、航空物流論など

地域産業

観光事業論 [、千葉県の産業と行政、ホテルビジネス論など

実 践

キャリア基礎開発Ⅰ、インターンシップⅠ、敬愛プログラムなど





ホスピタリティ論



プログラム開始から4年目を迎え、空港関連企業で働くために必 要な空港ビジネス科目内のホスピタリティ論やエアライン論を学 空港・観光関連企業でのインターンシップに参加した。(全受入企 業内20%が空港・観光関連企業) 訪日外国人への成田空港施設 でに成長することができた。

内案内や航空会社での搭乗旅客へのチェックイン業務や機内食 補助など多種多様な空港関連業務に従事した。受入企業からの び、習得した英語スキルをもとに、多くの学生が実践の場である 指導を活かして、空港での実業務を経験し体得したことで、学生 達がより一層、地域、空港で活躍したいとの明確な目標を持つま

課外授業について(夏期英語集中講座、国内スクーリング空港見学)

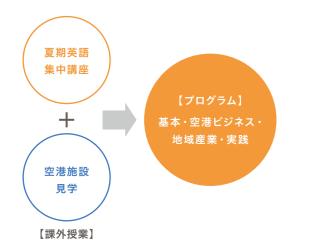
担当教員 国際学部 織井啓介教授、井上茂教授、中西絵美特別講師

担当学生 なし

事業協働機関 成田国際空港株式会社、JALスカイミュージアム

空港で働くために必要な基礎学力、実体験を課外授業で身に付ける。 English Campや英語力養成サマースクールは課外授業として、夏季 とで、より空港関連業務に関心を深く持たせることを目的とし、成田 長期休暇期間を利用し英語力を必要とする空港・観光関連への就職 志望者が英語能力をレベルアップできるよう集中講座で学習方法を 指導した。

現地学習では、大学の授業で学んだことを現場で実際に見る、知るこ 国際空港株式会社の協力のもと、成田空港施設見学やもう一つの首 都圏主要空港である羽田空港見学として、JALスカイミュージアム見 学を計画し実施した。





夏期英語課外授業





成田空港施設見学 JALスカイミュージアム施設見学

成果

プログラム授業の学びの補完として、課外授業で英語集中講座や生が多数となった。また、空港見学、空港従事者の講話を聴講す 成田・羽田空港の空港現場への見学を計画実施したことにより、 空港・観光関連企業で働くために必要な英語能力の確実なスキ ルアップにつながり、学生の満足度も大変高く継続を希望する学

ることで実際の空港業務や目には見えない現場業務を知る機会 となり、学生達は自身が空港関連企業で働くという目標をより明 確にし多くの学生が自己研鑽できるまでに成長した。

シンポジウム

(1) キックオフシンポジウム

テーマ

「千葉県の地方創生に挑戦する大学」

趣旨

千葉大学では参加大学とともに、文部科学省の地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)により、「都市と世界をつなぐ千葉地方圏の"しごと"づくり人材育成事業」を展開し、千葉地方圏の地方創生に取り組むとともに、地域の中で貢献し活躍する人材の育成を目指した様々な取り組みを実施していく。本事業の特徴は、千葉大学と参加大学が自治体や企業等との協働によって、地方の産業を振興し、雇用を創出し、若者の地元定着を進めていくことにある。本シンポジウムでは、千葉県のCOC+のキックオフとして、県内市町村の総合戦略を基盤とした、大学と地域の協働をテーマとし、大学、自治体、地域の立場から、その期待と可能性について考える機会とした。

日時

平成28年3月22日(火)14:00~17:00

会場

千葉大学けやき会館大ホール

プログラム

- 開会挨拶
- 事業概要説明 上野武 COC+事業責任者/千葉大学
- 基調講演「地方創生と大学の役割」 内閣府地方創生推進室
- パネルディスカッション「地方版総合戦略と大学の役割と期待」

鈴木雅之 横芝光町シティマネージャー/千葉大学准教授

早川卓也 いすみ市参事

齋藤雪彦 勝浦市プランニングディレクター/千葉大学准教授

モデレーター: 深谷信介 博報堂ブランドデザインスマート×都市デザイン研究所長

参加人数

280名







(2)協働大学合同シンポジウム

第1回合同シンポジウム 千葉工業大学

テーマ

千葉県 COC+シンポジウム「大学と共に創る明日の千葉県」

趣旨

本シンポジウムは、千葉県でのCOC+事業のこれまでの取り組みを、参加大学とともに広く紹介するとともに、ゲストスピーカーとして米国SRIインターナショナル(旧スタンフォード研究所)出身で地方創生において30年以上にわたって活動してきた専門家を招き、COC+事業のさらなる発展にむけた知見を得る機会として開催した。メルヴィル氏には、アメリカの地域活性化において第一次産業の生産物をブランド化している(日本でいう六次産業化の)取り組みの紹介と、地域の中におけるパートナーシップや協働の重要性について講演いただいた。後半では、会場の参加者からの質疑応答や論議に加え、参加大学の代表者とともにパネルディスカッションを行い、アメリカの事例をもとに千葉県COC+として今後進めていくことが望ましい取り組みについて論議した。



日時

平成28年10月11日(火)13:30~17:00

会場

千葉工業大学

プログラム

- 開会挨拶
- 主催者挨拶
- 基調講演:「地域再生を担う人材の育成」ジョン・メルヴィル Collaborative Economics 社共同代表(米国)
- パネルディスカッション「若者の雇用創出に向けた取り組みと大学の課題」

藪内正樹 敬愛大学教授

鎌田元弘 千葉工業大学副学長

伊永隆史 千葉科学大学教授

野中博史 聖徳大学短期大学部教授

大枝真一 木更津工業高等専門学校准教授

司会/進行:鈴木雅之 千葉大学COC+推進コーディネーター

参加人数

180名





15

第2回合同シンポジウム 敬愛大学

テーマ

健康で元気なまちづくり 医療と社会の改革による地域創生

趣旨

暮らしを充実させ、仕事を活発にするという視点から地域創生を考えるシンポジウムを開催し た。医療保健の破綻と社会の衰退を回避するため、まず医療を「いかに良く生き、良く死ぬか をプロデュースする総合生活産業」と再定義する八王子で医療法人社団KNIを経営する北原 茂実理事長の理論と実践に学び、地域の現状と課題を話し合い、技術革新や新産業を生み出 す明るく元気な地域創生への一歩を踏み出すことを目的とした。

日時

平成29年2月22日(水)13:30~17:00

会 場

敬愛大学

プログラム

- 開会挨拶
- 基調講演「あなたの仕事は"誰を"幸せにするか」 北原茂美 医療法人社団 KNI 理事長
- パネルディスカッション「健康で元気な地域創生」

北原茂美 医療法人社団 KNI理事長

亀田隆明 医療法人鉄蕉会 亀田総合病院

伊藤真美 花の谷クリニック院長/安房医療ネット世話人

参加人数

76名



第2回 千葉県COC+合同シンポジウム

健康で元気なまちづくり

医療と社会の改革による地域創生

2.22

敬愛大学 稲毛キャンパス

13:30~17:00

17:10~18:30

⋘地(知)の拠点

第3回合同シンポジウム 千葉科学大学

テーマ

フィッシュ・ファクトリーと地方創生~産官学金連携の視点から~

趣旨

千葉科学大学が平成24年度から実施しているCISフォーラムの第6回目と併せて実施された。 COC+合同シンポジウムと併せて開催することで、地元銚子から、千葉県全体に地域連携が 広がりCOC+によるローカルイノベーションに挑む試みの表れという意義があった。銚子信 用金庫の松岡理事長に特別講演、COC+からは千葉大学の地域イノベーション部門長の鈴 木准教授を含む産官学金を代表した方々が一堂に会して、産官学金が地方創生にできること について、現状や課題、今後の展望などを忌憚無くパネルディスカッションした。

日時

平成29年10月14日(土) 13:00~17:00

会場

銚子プラザホテル

プログラム

- 開会挨拶
- 基調講演「海外展開を通じた地域経済活性化について」 石毛博行 日本貿易振興機構 (JETRO) 理事長
- 特別講演「フィッシュ・ファクトリーシステムの開発および大学発ブランド水産種の生産」 小濱剛 千葉科学大学准教授
- 特別講演「地方創生に向けた地域金融機関の役割」 松岡明夫 銚子信用金庫 (COC+事業恊働機関) 理事長
- パネルディスカッション「産官学金連携が地方創生にできること」

鈴木雅之 千葉大学 地域イノベーション部門長 松岡明夫 銚子信用金庫 理事長

笹本博史 銚子市 産業観光部長 伊東輝侑 銚子商工信用組合 理事長

島田政典 島長水産 代表取締役

佐久間快枝 銚子ビール 代表プランナー

モデレーター: 木村栄宏 千葉科学大学教授

• ポスターセッション

参加人数

234名







第4回合同シンポジウム 聖徳大学短期大学部

テーマ

大学教育と地域創生~産官学金協働による地域づくり~

趣旨

聖徳大学短期大学部は、主に千葉県南房総市と協働し活動を展開している。本シンポジウムで は、聖徳大学短期大学部のCOC+事業のこれまでの取り組みを紹介するとともに、千葉県に かかわりのある有識者をお招きし、COC+事業のさらなる発展に向けた知見を得る機会とし た。基調講演は、日経グローカルの可部主任研究員より、日経グローカルが実施している大学 の地域貢献ランキングから、動向や課題について講演いただいた。3件の学生発表に続き、パ ネルディスカッションでは特にCOC+推進上のさまざまな課題について、ディスカッションが 行われた。

日時

平成30年2月20日(火)13:00~16:30

会 場

聖徳大学香順メディアホール

プログラム

- 開会挨拶
- 基調講演「大学教育と地域貢献~動向と今後の課題~」 可部繁三郎氏 日経グローカル主任研究員
- 学生発表
- 聖徳大学短期大学部学生 千葉工業大学学生
- パネルディスカッション「大学教育による地域創生~産官学金による地域づくり~」

榊田直美氏 千葉県総合企画部政策企画課副課長

寺田佳宏氏 日本貿易振興機構 (JETRO) 企画部総括審議役

青柳俊一氏 株式会社千葉興業銀行代表取締役頭取

長谷川弓子 聖徳大学短期大学部総合文化学科講師

コーディネーター:野中博史 聖徳大学短期大学部総合文化学科長

• 活動報告展示

参加人数

150名







≪地(物)の物点

2月20日(火) 13:00~16:30

150名(東本和中山

#15:047-365-1111 (±€#.

⑤ 里德大学短期大学部 ▲

11 11

第5回合同シンポジウム 千葉大学

テーマ

地域と学生が共に成長するプロジェクト学習

趣旨

千葉COC+では、地方部の課題を解決するために、学生たちが具体的なプロジェクトを企画、 実行し、その課題解決の過程からさまざまな学びを得る機会が増えてきている。そのような中 で、学生の成長だけではなく、地方も同時に成長するような、まさにCOC+の目的に合うよう な学習方法はどのようなものなのか議論を進めた。基調講演をいただいたシンクタンク未来 教育ビジョン代表の鈴木敏恵氏からは、学生の学びを最大限に引き出す学習プログラムのテ クニックではない精神について多くの中身が得られた。パネルディスカッションでは、千葉工 業大学副学長の鎌田教授、いすみ市副市長の早川氏、千葉大学学生の加治屋さんに参加いた だき、それぞれの立場から学生の学びと同時に千葉の地方や地域をさらに元気にするようなプ ロジェクト学習をどう進めればよいか、そして地域、自治体、大学など関係する人たちはどのよ うに協働すべきかを共に考え、充実したものとなった。また、学生発表のプロジェクト学習のポ スターセッションでも、学生はさまざまな気づきを参加者から与えていただいたようであった。



日時

平成30年10月16日(火)13:30~17:00

会 場

千葉大学けやき会館大ホール

プログラム

PART1 シンポジウム

- 開会挨拶
- 講演「プロジェクト学習で"価値を生める人"になろう!」 鈴木敏恵 シンクタンク未来教育ビジョン代表
- パネルディスカッション「千葉の地域を元気にするプロジェクト学習」

コーディネーター:鈴木雅之 千葉大学COC+推進コーディネーター

鈴木敏恵 シンクタンク未来教育ビジョン代表、鎌田元弘 千葉工業大学副学長、早川卓也 いすみ市副市長、加治屋里奈 千葉大学学生

PART2 学生によるポスターセッション

• 各大学の千葉の地方・地域でのプロジェクト学習

参加人数

230名





第6回合同フォーラム 千葉大学

「 テーマ]

ローカルちばでキラリと光る!

趣旨

ますます東京一極に拍車をかけている状況の中で、再度ローカルで働くことの意味、ローカルのライフスタイルの特徴を探り、千葉地方圏へ目を向かわせ、就業等の選択肢として考える機会をつくることを目的に開催した。ローカルちばでキラリと活躍する若手人材から、千葉地方圏での働き方やライフスタイルを伝えていただいた。セッション毎に、起業してよかった点や、起業する際の不安の有無、今後の働き方ややりたいこと等についてディスカッションを行い、千葉県内でのキャリア形成のポテンシャルについて再認識することができた。

またパネル展示では、千葉大学および COC+参加大学 (敬愛大学、千葉工業大学、木更津工業高等専門学校、千葉科学大学、聖徳大学短期大学部)による COC+5年間の活動報告を行った。

日時

令和元年11月29日(金)12:50~17:00

会 場

千葉大学けやき会館大ホール

プログラム

第1部 パネル展示

各大学のCOC+5年間の活動報告

第2部 フォーラム

- 開会挨拶
- セッション1「千葉での起業を語る」

講演1:多田朋和 合同会社WOULD代表(千葉工業大学卒)

講演2:馬上丈司 千葉エコ・エネルギー株式会社代表取締役(千葉大学卒) ディスカッション

● セッション2「地域のために働く」

講演3:柴崎弘佳 株式会社ウェザーニューズ(木更津工業高等専門学校卒)

講演4:山崎貴也 千葉商工会議所(敬愛大学卒)

ディスカッション

コーディネーター: 鈴木雅之 千葉大学 COC+推進コーディネーター

参加人数

110名

































































千葉大学コミュニティ・イノベーションオフィス